百々裏話（75）

おもて　あきら

〔明和改正謡本の周辺―その一〇〕

本年六月、観世宗家所蔵文書を調査させていただいて、明和本についても幾つかの新見を得ることができた。とりあえず『副言巻』に関することを報告しておきたい。

⊙『副言巻』について（4）

まず第一の収獲は、『副言巻』が全十三冊であったらしいことが判明したことである。観世宗家の文書の中に、『副言巻』の題簽のみを一括した小さな一包みがあったが、それには、若干の重複を除き、「副言巻目録」と「副言巻第一」から第十二までの十三種の題簽が入っていた（写真参照）。題簽のみが先に作られ、実際には刊行されずに終った冊があったことも考えられないではないが、まずは『副言巻』は目録とも全十三冊であったと推測してよいであろう。以前に第十一が最終冊であろうと述べた私説は、撤回せねばなるまい。それにしても珍しい資文が残存していたもので、同様なケースを聞いたことがない。観世大夫自身が刊行者であったからこそ、こうした文書が観世宗家に残ったのであろう。

次に、観世宗家蔵の『副言巻』八冊を調査し得たことである。同書の存在についてはすでに言及してあったが、精査の機を得なかったので、前回までの考察は鴻山文庫蔵の三冊（第一・三・十一）に基づいていた。観世宗家本は、第一～六、九、十一の八冊で、鴻山文庫の三冊はすべてダブッており、あい補う冊が無いことが残念である。八冊とも朱色表紙で、鴻山文庫本の紺表紙とは異なる。明和本の通常の謡本の場合と同様、朱色表紙が上製本、紺表紙が並製本の関係であろうか、八冊中の三冊は鴻山文庫本に基づいて考察した巻なので、以下、観世宗家本のみに存する巻の内容のみを略述しておこう。

巻第二は、「初能佐詞ワキノウノワキコトバ」と内題のある前半部と、「初能之轉間ワキノウノシャベリアヒ」と内題のある後半部とに分たれ、前者はワキの着キゼリフのみで、白髭・白楽天・氷室・養老・賀茂・竹生嶋・大社・寝覚・榎島・逆矛・富士山・海藻刈・絵馬・嵐山・岩船の十五曲分を収める。後半は中入の末社形式のアイの立シャベリ、またはそれに準ずるアイのセリフで、前記の曲名から榎島を除き、玉井を加えた十五曲分である。絵馬の



鬼三四、寝覚の仙人二人、玉井の貝尽しなど複数の役者が登場するアイも含まれる。巻第一が脇能のうち語りアイの分を収めていたのに対し、巻第二は末社形式のシャベリアイの分の曲を収めているわけで、第一、二で脇能の分が網羅されていることになる。但し嚢島のアイが除かれている点は注意を要しよう。末社三段の舞の謡の文句が曲によって違っていたり(白楽天・富士山など)、竹生嶋の岩飛びのアイが少しも面白みのない文句になっていたり、元章改作と見られる点が多い。

巻第四は、別に内題が無く、野宮・仏原・井筒・采女・定家葛・夕顔・六浦・誓願寺・当麻・藤・落葉・三輪・竜田・梅・軒端梅・松風・江口・名取嫗・吉野天人・遊行柳・葛城・西行桜・安達原・牽牛花・阿漕・百万・大原御幸・妓王・住吉詣・二人静・室君・弱法師・冊子洗・葵上・小督・六月被の三十六曲のアイのセリフ等を収めている。若干の例外(阿漕・弱法師)はあるものの、三番目物、及び女能の数が一括された形である。ワキの着キゼリフ、アイのオシエやフレや立シャベリ、ワキとの問答など、種々雑多なセリフが集められており、曲柄に統一がない点とあいまって、この冊に限り特定の内題が無いのも道理と思われる。注目すべきは、三番目物の類を収めていながら純粋の語リアイが一つも含まれていないことで、井筒を例に引けば左のような文言である。

俳へ是ハ此あたりに住居する者にて候。今夜は月の清けく候へバ。在原寺へ立越。眺めばやと存る。いや是に見馴ね御僧のわたり候よ。何のためか様にてハ御座候ぞ

佐へ御不審尤にて候。是ハ諸国一見の僧にて候。我此寺にやすらひ候処に。いづくともなく女性一人来り給ひ。是なる塚に廻行の気色みえ給ひ候程に。如何なる人ぞと不審をなして候へば。就レ夫 業平夫婦の御事懇に語其後。井筒の女ハ我なりと云もあへず。かきけすやうに姿を見うしなふて候程に。不審に存しバらく逗留致て候よ

俳へ是ハふしぎなる事を承候ものかな。然らば今夜ハ此所にて。有難き御経を御読誦なされ。業平夫婦の御跡を御弔ひあれかしと存候 佐へ我等もさ様に存候間。今夜ハ此所に候ひて。業平夫婦の御跡を弔ひ申候べし 俳へ何にても御用の事あらば承らうずるにて候 佐へ頼候ハん 俳へ心得申候

アイが登場して言葉を掛けるとすぐに、ワキが現在の語リ後のセリフに近い文句を口にするわけで、この形ならば、今のアイの三分の一ほどの時間ですみそうである。昔から語リアイであった曲が本冊の場合みな右の井筒と同形であるから、元章は三番目物その他若干の曲の中入アイから語リを省略する意向を持っていたと考えざるを得ない。演能時間の短縮が目的で、前段の繰返しに終始するアイの不評は今と変らなかったのであろう。なお、語リのない井筒の中入アイの形は、元章がそのことを知っていたかどうかはともかく世阿弥自筆能本の「江口」などに見られるものと同形であり、今後のアイの方向を考える上でも参考するに価しよう。

巻第五は、「佐俳詞」と内題のある前半部と「間之語」と内題のある後半部から成り、両部分ともに融・小塩・雲林院・泉郎・殺生石・熊坂・鵜・野守・鵜飼・項羽・錦木・山姥・阿古屋松・鍾馗・船橋・女郎花の十六曲分を収める。前半部がワキの着キゼリフや語リ前後のワキとアイとの問答などで、後半がアイ語リの文句である。四・五番目物の語リアイの曲を収めた冊と言えよう。

巻第六は、内題に「大夫佐佑俳詞 シテワキシテヅレヲカシノコトバ」とあり、いわゆるアシライアイのセリフ、及びそれと応答するシテやワキのセリフを収めた冊である。三井寺・国栖・放下僧・芦刈・弄太鼓・自然居士・壇風・藤栄・船弁慶・安宅・花月・大江山・班女・吉野静・丹後物狂・高野物狂・巻絹・鉢木・接待・唐船・富士太鼓・鳥追舟・鉄輪・邯鄲

・染川・桜川の二十六曲を収める。通常の謡本に収められている文句を含む場合があり、副言の定義に困難を感じさせる冊である。

巻第九は、「祝言能自称並待謡」と内題があり、脇能を祝言能(半能)に用いる際の、冒頭のワキの名ノリと待謡の文句を収める。高砂・弓八幡・呉服・松尾・淡路・御裳濯川・葛城鴨・養老・賀茂・竹生島・嵐山・逆矛・岩船・金札の十四曲。末尾に、元章自身のものと思われる左の跋文がある。

祝言てふものハ、其日を祝をさむる事なれば、殊に重き役人のすべきを、遠からぬ世より、皆初心の者又ハ下手あるひハ弟子等のつとむる役の様におもひなせるハ、古にたがへるなり。されば、祝言の佐の置鼓にて出る事、はた自称様をさへしれる人もなくて、かしましき次第のうち様をのみ聞なるハ、いとはづかし。

以上が『副言巻』観世宗家本八冊のうち、以前に鴻山文庫本に基づいて考察した分を除く五冊分の内容の概略である。考察ずみの分と合わせて、観世大夫元章の言う、「副言」なるものの輪郭が、より明確に把握できよう。

目録を除く十二冊のうち、第七、八、十、十二の四冊分の内容が不明であるが、次回にその点を推測してみたい。(45・9・3)

〈出演予定〉

9月13日(日) 日立市市民会館の能　隅田川(雅) 仕舞敦盛クセ(順之) 江口キリ(真広) 融(宏充) 忠度(真義) 花筐狂(寿夫)

9月15日(火) 離見会(京都) 屋島 弓流素働那須ノ語(慶次郎) 定家(博太郎) 仕舞柏崎(銕之丞) 舞囃子東方朔(寿夫 静夫)

同 25日(金) 淡交同人会(観世会館) 葵上梓ノ出(銕之丞 ッレ宏充) 仕舞(寿夫)

同 28日(月) 繭の会(観世会館) 枕慈童(宏充) 萩大名(則直) 融(真広)

同 30日(水) 橋岡会(観世会館) 通小町(寿夫ッレ四郎)

10月4日(日) 山本定期会 能山姥(順之)

同 7日(水) 芸術祭能(水道橋) 一調羅生門(寿夫 金春惣右衛門)

同 8日(木) 芸術祭能(水道橋) 恋重荷(銕之丞ッレ順之)

同 27日(火) 湘南能楽鑑賞会(藤沢市市民会館) 藤戸(銕之丞) 仕舞笠之段(静夫) 笹之段(寿夫)

同 29日(木) 大規清韻会(観世会館) 仕舞実盛(銕之丞) 野宮(寿夫)

11月3日(火) 大規氏別会(大阪) 半蔀(銕之丞) 乱(寿夫)

放送 NHKTV 11月3日(祭) 10時半 能砧(銕之丞ッレ善助 地頭寿夫)

各流
はかま
帯・袴
もちや〈薗部〉
千葉県市川市真間2の11の17
電話 〇四七二―二六二・九六六

能・お茶の御写真
観世写真部
前島良彦
前島久男
港区白金台二の二の三
電話白金(441)一八四七五番
〇一五〇〇九番